

現代中国のジェンダー不平等と SNS： 鄭靈華事件を手がかりとしたフェミニズム的研究

林 奕 娜*

Gender Inequality and Social Media in Contemporary China:
The Zheng Linghua Case through a Feminist Lens

LIN YINA

【要旨】

本稿は、SNS時代の現代中国において、ジェンダー不平等がいかに可視化され、再生産されているのかを、2022年に発生した鄭靈華事件を手がかりに検討するものである。女性の高等教育進学率が上昇する一方、高学歴女性による成功の可視化が、嫉妬や反発を招き、誹謗中傷へと転化する現象がSNS上で顕在化している。本稿では、被害者・加害者・メディアという三つのアクターに着目し、事件の展開を段階的に分析した。その結果、SNSの匿名性・即時性・多数性が、ジェンダー規範や競争意識と結びつき、集団的バッシングを増幅させる構造が明らかとなった。さらに、事件後の議論が制度論へと収斂する過程で、ジェンダー不平等という根源的問題が周縁化される傾向も確認された。

キーワード：ジェンダー不平等、SNS、高学歴女性、ネット中傷、フェミニズム、デマ拡散

Keywords : Gender inequality, Social media, Highly educated women, Online harassment, Feminism, Misinformation spread

1. はじめに

近年、中国ではSNSが生活基盤に深く浸透し、2024年上半期時点でインターネット利用者は約10億9967万人（普及率78.0%）に達している（中国互聯網絡信息中心 2024）。この巨大なSNS空間は自己表現を容易にする一方、感情的内容や虚偽情報が急速に拡散するリスクを孕み、ジェンダー中傷やステレオタイプが蔓延する土壌となっ

ている。

一方、女性の高等教育進学率は著しく上昇し、2023年時点で高等教育在学者の49.9%、大学院生の50.6%が女性となっている（中華人民共和国国家統計局 2025）。しかし教育機会の拡充にもかかわらず、労働市場では依然として男性優位が残存し、就職や昇進でのライバルを増やしたくない男性たちが高学歴女性性を排除しようとする動きがある。「高学歴女性は扱いにくい」「高齢未婚女性は『剩女』」

* 島根大学大学院人間社会科学研究所社会創成専攻修士課程

といったステレオタイプが広く流通し、「三高」（高学歴・高収入・高年齢）というレッテルによる差別的言説さえ見られる。学歴水準は上がっても社会的評価や婚姻市場でマイナスの烙印を押される矛盾が、高学歴女性に独特のプレッシャーを生んでいる。

「教育アクセスの平等」と「就業・評価の不平等」のギャップは、SNS 上で高学歴女性が「成功」を可視化した際に逆風として表出しやすい。その典型例が 2022 年の「鄭靈華事件」である。鄭靈華事件は、2022 年から 2023 年にかけて中国の SNS 空間およびマスメディア上で大きな社会的議論を引き起こしたネット中傷事件である。鄭靈華（1998 年生）は、中国浙江省出身の女性で、2022 年 7 月、トップクラス大学である華東師範大学大学院への合格を自身の SNS アカウント上で報告した。ところがこの投稿が「自慢している」と受け取られ、彼女のピンク色の髪なども槍玉に挙がり「夜店女子」等の侮蔑的レッテルを貼られた。事実無根のデマが流布され、半年以上のネット中傷の末、彼女は自ら命を絶った。本事件は、女性への監視と制裁がいかにジェンダー化された構造のもとで行われているかを可視化した。

鄭靈華事件のプロセスは、SNS 特有の拡散構造に加え、嫉妬感情、ジェンダー規範、競争意識という複合的要因の絡み合いを示している。高学歴女性をめぐる言説的ジレンマ（称賛されるが攻撃対象にもなる矛盾）は、デジタル時代の中国社会におけるジェンダー構造の歪みを映し出す現象であろう。

本稿は、こうしたジェンダー構造の歪みと SNS の相互の関係を、フェミニズムの視点から現代中国社会の文脈で明らかにすることを目的とする。具体的には、デマ生成者・拡散者・被害者という三つの側面から、誹謗

中傷の生成・拡散メカニズムを解明し、学歴インフレが進む中国社会で高学歴女性が置かれた位置づけと、競争意識や嫉妬の力学、職場・家庭での役割期待から生じる圧力構造を可視化し、SNS 時代の「成功の表現」が集団的バッシングへ転化する過程とその背後のジェンダー秩序・大衆心理を読み解く。

これにより、SNS 時代の中国における高学歴女性をめぐる言説構造と、ジェンダー不平等の再生産メカニズムを明らかにする。

2. 先行研究

譚亞明（2012）は、中国メディアにおけるジェンダー報道が固定的な性別観に縛られている現状を批判し、女性当事者が「被害者」か「逸脱者」として描かれる傾向を指摘した。四方由美（2021）は、インターネット空間における「デジタル・タトゥー」現象が女性被害者への偏見を増幅すると警鐘を鳴らしている。これらの議論は、被害女性が一方的に「弱い存在」や「問題の源」として位置づけられることで、当事者の多様な語りや封じられ、ジェンダー構造の再生産に加担する危険性を示している点で、本稿の分析視角と接続する。伍麗亜（2022）は、中国 SNS プラットフォームにおける「トラフィック至上主義」、すなわち閲覧数や拡散性を最優先する運営方針が、感情を煽る対立的コンテンツをアルゴリズム上で優遇し、扇情的情報の拡散を助長していると指摘する。これらの研究は報道フレーミングやプラットフォーム構造といった「情報環境の外在的要因」を明らかにしたと言えるが、構造が個人の行為をどのように方向づけ、特定の人物を標的化する状況を生み出すのかというマイクロ・マクロ連関は十分に説明されていない。

また、SNS利用が自己イメージにどのように影響するのかについて論じた先行研究では、SNSでは「完璧な自己表象」を求められる圧力が存在し(Boyd 2014)、ユーザーは理想化された自己イメージを提示しがちで、このような選択的自己呈示は、閲覧者に上方比較を促し、嫉妬感情を誘発し得る(Chou and Edge 2012)という指摘がある。また、田中辰雄・山口真一(2016)は、匿名環境において責任の希薄化が生じることで、集団的攻撃が発生しやすくなるメカニズムを明らかにした。しかし、SNS上の自己表象が、どのようにジェンダー化された中傷や嫉妬の力学と結びつき、特定個人への攻撃を正当化する言説へと転化していくのかについては、十分に議論されていない。

男性優位社会における高学歴女性バッシングに関しては、Fincher(2014)が、「剩女」言説が高学歴未婚女性を「社会問題」として構築してきた過程を明らかにした。上野千鶴子(2015)は女性が自らを「例外的な女」と位置づけることで他の女性を貶める「厭女症」を論じ、中国の「雌競」現象も同様の構造を持つという。これらの研究は高学歴女性を取り巻く偏見の構造を示したが、構造的ジェンダー不平等がオンライン空間でどのように再構築・具象化されるか、特に女性自身が他の女性を攻撃する言説形成プロセスは未解明である。

3. メディア視点からみた鄭靈華事件の展開とアクター間相互作用

3.1 分析手法とデータ

これまでの研究では、SNSの中でジェンダー不平等がどのように構築・再構築されていくのか、そのプロセスについて詳細に論じ

たものがほとんどないことを受け、本稿では、先に言及した「鄭靈華事件」の事例について分析する。

分析にあたっては質的手法を用い、収集データとしては、事件発生から結末までの鄭靈華本人および関係者のSNS投稿と一般ユーザーのコメント、および主要な報道記事(地方メディア「杭州都市快報」、中央メディア「中国青年報」・「法治日報」、ネットメディア「鳳凰深調」・「環球人物」・「北青深一度」等)を中心に整理する。報道記事は社会全体の議論方向を形作る重要な役割を果たすため、その内容を精査して事件経過との関係を分析する。またSNS上の投稿や拡散行為は、事件に直接関与する人々の感情や社会的規範意識を反映する言説実践として位置づけ、特に匿名のユーザーによる誹謗中傷や拡散のパターンに着目する。

分析手法としては、社会学的な言説分析と相互作用分析の枠組みを組み合わせる。言説分析の観点から、SNS投稿や報道記事に表れるジェンダー的偏見や成功表現への反応、差別的言及のパターンを抽出し、その背後にある社会的規範や権力関係を読み解く。相互作用分析の観点からは、事件の進展過程を「被害者—加害者—メディア」の三者が動的に絡み合うプロセスと捉え、各段階におけるプラットフォーム(SNS)の役割と情報拡散の様相を分析することで、個人の行為と社会構造の連関を明らかにする。

3.2 事件の展開と相互作用の分析

事件に関するSNS上の投稿内容、拡散経路、メディア報道の量的・質的变化、ならびに主要アクターの言説の推移を時系列的に整理・分析した結果、事件の展開には性質の異なる複数の局面が存在することが確認され

た。それぞれの局面は、単なる時間的経過ではなく、情報の流通様式、論争の中心的争点、メディアの関与の仕方、ならびに被害者・加害者・メディアという三つのアクター間の関係性が質的に転換する節目として、情報拡散期、爆発期、結末期、影響期という四つの段階に区分できることが分かった。

各段階においては、SNSの匿名性・即時性・多数性による対立の過熱、メディア報道による論争の拡大、賛否両論の二極化と論争構造の固定化、さらに悲劇的結末に伴う議論の矮小化といった特徴的な現象が確認される。以下、これらの特徴を手がかりとして各時期におけるメディアの関与のあり方と三つのアクターの相互作用を具体的に検討する。

3.2.1 第1段階：情報拡散期

(2022年7月13日～7月26日)

第1段階のプロセスを図1に示す。2022年7月13日午後、鄭靈華は華東師範大学大学院の合格通知を受領し、当日夕方と夜にSNS上で合格の喜びを投稿した。これらは、個人的な達成感や家族への感謝を共有する内容の投稿であった。しかし翌14日、鄭靈華の写真が無断で盗用され、出所不明の虚偽広告に使用されていることが判明する。彼女は直ちに盗用を通報したものの、プラットフォーム側の対応は不十分で、写真や動画は瞬く間に拡散し、多数の中傷コメントやデマが寄せられる事態へと発展した。

7月21日、浙江楷立法律事務所の金曉航弁護士が杭州都市快報の報道を目にして鄭靈華への無償代理支援を申し出た。杭州都市快報は地方メディアとして初めて事件を報じたが、この時点では社会的に大きな注目を集めるには至っていなかった。さらに7月23日、鄭靈華は精神的負担から浙江省立同徳病院で「う

つ状態」と診断され、同日夜には中国青年報の取材を受けた後にトレードマークであったピンク色の髪を黒髪に染め戻している。この変化は社会的圧力に適応しようとする防衛的行動とも解釈できる。7月26日には、鄭靈華は自らのWeiboアカウント（ハンドルネーム「鶏蛋姫」）を通じて弁護士通知書を公開し、各プラットフォームに対して違法に流布された写真や動画の削除を公式に要求した。

以上のこの第1段階に特徴的なのは、被害者による自己表現が、加害者による意図的な情報歪曲によって攻撃的に転化していくプロセスである。実際、鄭靈華は、その創造的で個性的な自己表象（たとえばトレードマークのピンク色の髪）をSNS上で発信していたが、有名大学院合格の成功と個性の表出自体が一部のネットユーザーの偏見や反発を招き、やがて悪意ある中傷の対象となった。祖父と喜びを分かち合う微笑ましい投稿でさえ揶揄や攻撃の標的と化し、「幸せ」や「成功」の表現が必ずしもポジティブに受容されないSNS空間の危うさが露呈したのである。

さらに、匿名性・即時性・多数性といったSNSの特徴によって個々人の責任意識が希薄化し、オンライン上の脱抑制によって群集心理が強まり、集団的攻撃が生じやすいことが指摘されている（Suler 2004; Spears & Lea 1994）。実際、鄭靈華のケースでも、投稿直後から数多くの誹謗コメントが殺到し、瞬時に炎上広がったのである。こうした攻撃的言説には「不真面目だ」「浮ついている」といった偏見に満ちたレッテル貼りや、根拠のない性的なデマの捏造（中国語でいう「造黄謠」に相当する蕩婦羞辱）が含まれていた。これらの言説は典型的なジェンダー差別に基づいており、社会に根強い「女性は慎ましくあるべき」というステレオタイプが匿名空間

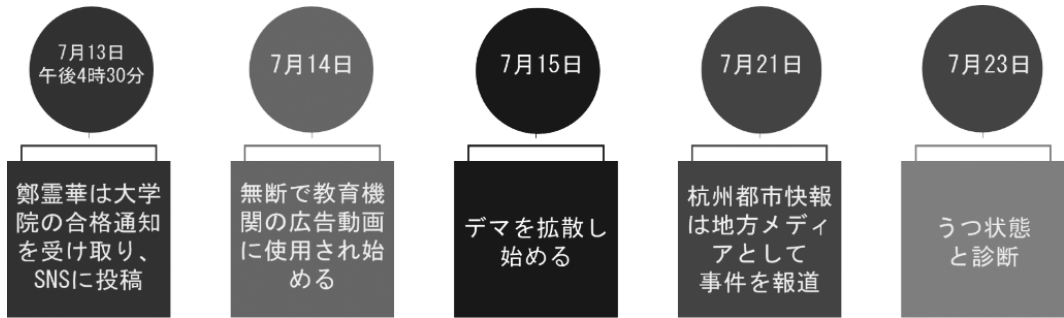


図1 鄭靈華事件における情報拡散期のタイムライン（2022年7月13日～7月26日）
（出典：公開情報を基に筆者作成）

で一気に噴出したものと言える。なお、SNSプラットフォームが初期段階で適切な介入を欠いたことも、後の中傷拡大を許してしまった大きな要因であったと考えられる。

そして、さらに特筆すべきは、主要な加害者の属性である。中傷コメントやデマを主導した「杭州土匪」は法学修士号を持つ高学歴の男性であり、ネット炎上の加害者は社会的地位の低い、嫉妬やひがみの感情を持つ者だとする通念を覆す存在だった。彼は被害者の学歴的成功や自己表現のあり方に強い不満を示した。そして、鄭靈華本人が法的措置で反撃したことも相まって攻撃はますますエスカレートした。これは単なる個人間の嫉妬に留まらず、高学歴女性の「成功」やその可視化をめぐる現代中国社会に潜在する深層的な摩擦が表面化したものと解釈できる。実際、高学歴者同士であっても激しい敵意が生じ得る本事件の様相は、競争的な社会構造のもとでの女性の台頭に対する抵抗や葛藤を象徴していると考えられる。

3.2.2 第2段階：爆発期

（2022年7月27日～9月）

第2段階のプロセスを図2に示す。2022年7月27日、中央メディアである『中国青年報』が鄭靈華へのインタビュー記事（「女

孩求职遭遇网络暴力：我一夜之间掉进了深渊」）を公開した（中国青年報 2022）。この記事は複数のニュースサイトに転載され、公開直後から微博上で大きな反響を呼び、関連ハッシュタグは数時間以内に上位に浮上したと報じられている。こうした中央メディア報道による急速な可視化を契機に、各種ネット系ニュースメディアやSNS上の多数の情報発信者がこの話題に飛びつき、刺激的な見出しや感情に訴える内容の記事を次々と配信した。いわゆる「流量至上主義」（閲覧数やクリック数の最大化を最優先する姿勢）に基づくこうした報道姿勢が、短期間で世論を煽り立て、鄭靈華事件を一気に全国的な議題へと押し上げたのである。対立をセンセーショナルに描き注目を集めようとする記事が横行した結果、中傷の拡散はさらに加速し、SNS内部の炎上は現実社会の大衆をも巻き込む大規模な論争へと発展していった。

8月29日、ネット系メディアの「鳳凰深調」は鄭靈華の権利保護の過程を詳細に報じ、事件から浮上した制度的課題やSNS上での法的支援の不十分さに光を当てた。さらに9月22日には「環球人物」が事件を総括し、ネット中傷が構造的な社会問題であると訴えている。これら一連の報道は単なる出来事の逐次報告にとどまらず、問題の本質を社会的課題

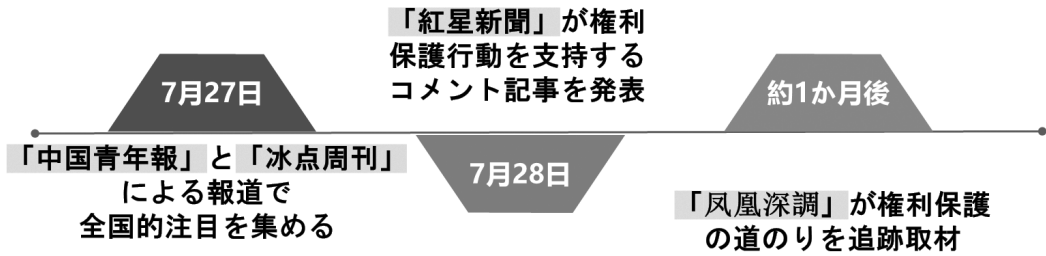


図2 鄭靈華事件における爆発期のタイムライン（2022年7月27日～9月）
（出典：公開情報を基に筆者作成）

として再定位する役割を果たしたと言える。注目度の急上昇に伴い、この段階では肯定的評価と否定的中傷の双方が同時並行的に増幅された。つまり、世論は賛否両論に二極化し、論争の構造が固定化されていった。一方には被害者を擁護し中傷加害者を非難する声があり、他方には被害者にも落ち度があったのではないかと示唆し、加害者側を擁護するような意見すら散見された。SNS やコメント欄ではこの二極化した主張がエコーチェンバー現象によって互いに増幅し、対立は自己増殖的に続いた。メディア報道もまた「賛成派 VS 反対派」という構図を強調しがちで、それぞれの立場を代表する極端な意見が取り上げられる傾向があった。結果として、問題の本質をめぐる冷静な議論は影を潜め、誰を糾弾すべきかという感情的応酬に議論空間が占拠されてしまったのである。

このような論争構造の固定化は、被害者・加害者双方にとって不毛な結果をもたらした。実際、鄭靈華が命を絶った後も対立の連鎖は断ち切れず、今度は主要な加害者であった「杭州土匪」自身が逆にネット上で激しい非難の的となった。本来ならば一方向的であったはずの加害行為が、立場を入れ替えて繰り返されるという循環的な暴力性を物語っている。つまり、論争の土台となる構図が二

極化したまま固定されてしまうと、新たな局面でも同じ対立軸上での攻撃が横行され、誰も救われないまま社会的亀裂だけが深まる傾向がある。

3.2.3 第3段階：結末期

(2023年2月19日～3月)

第3段階のプロセスを図3に示す。2023年2月19日、鄭靈華がうつ病により自死したとの情報がネット上に流れ、事件は最も痛ましい結末を迎えた。この知らせは瞬間に微博や各種 SNS で拡散され、中国社会全体に大きな衝撃を与えた。翌2月20日以降、複数のメディアが彼女の生前の状況や長期にわたる中傷被害の影響を詳報し、ネット中傷が個人の生命に直結し得る深刻な社会問題であることが改めて可視化された。

2月22日には「スラット・シェイミング (Slut-shaming、蕩婦羞辱)」の問題が各メディアや SNS 上で論じられ、女性がとりわけ標的にされやすい社会構造上の問題が広く共有された。これにより、事件は単なる一個人の悲劇を超え、女性差別的言説や性規範の強制といったより広範なジェンダー問題と結びつけられるようになった。

さらに2023年2月23日には、北京青年報の深度報道欄「北青深一度」が「直到网暴的潮水将那朵粉色吞没」と題する長文記事を公

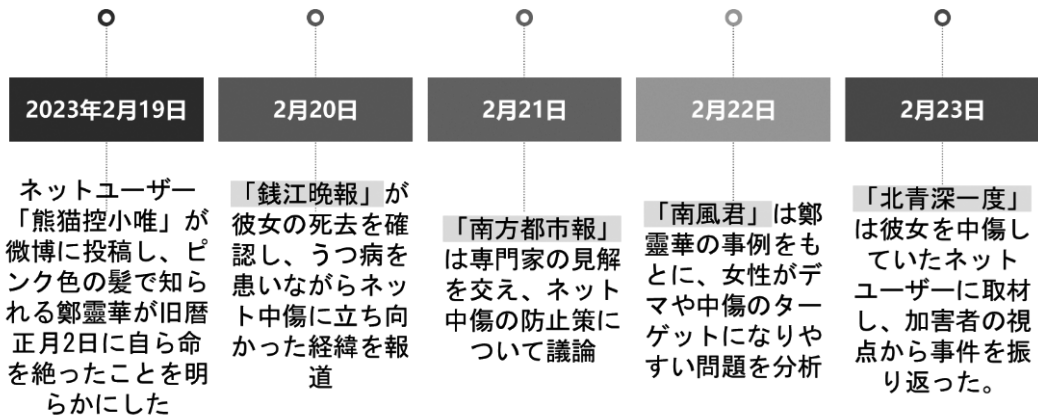


図3 鄭靈華事件における結末期のタイムライン（2023年2月19日～3月）

（出典：公開情報を基に筆者作成）

開し、事件当初から鄭靈華と対立していたユーザーによる投稿内容や、その後の発言の変化を整理した（北青深一度 2023）。この報道は、主要な加害アカウントとして広く認知されていた「杭州土匪」について、当人がSNS上で示した言動や心情の揺れを時系列で取り上げることによって、加害側の内面や動機の一部を可視化したものである。記事では、鄭靈華の死後も中傷が完全には止まらず、やがて一部の加害者自身が「逆に中傷の標的」となっていく過程が描かれており、ネット中傷が単なる一方向的な加害行為ではなく、状況次第で「加害と被害が循環する構造」を生み出し得る危険性が示唆されている。

同様の問題関心は、中央メディアである『法治日報』（法治日報・法治網）の論説にも見られる。法治日報は、相次ぐネット暴力事案の一つとして「粉色頭髮」の鄭靈華事件を取り上げつつ、ネット中傷における証拠保全の困難さや被害救済制度の不備、さらには反ネット暴力に関する専門立法の必要性について法律専門家の見解を紹介している（法治日報 2023）。こうした報道は、個別事件の悲劇を超えて、ネット暴力を法制度上どのように

位置づけ、いかなる規制枠組みを構築すべきかという方向性を提示する役割を果たしたと言える。

第3段階は、被害者の死によって社会的議論が大きな転換点を迎えた局面である。ここでは加害者像やメディアの責任が新たな角度から問い直され、個人の命を奪うに至ったネット中傷の深刻性が強調された。そして同時に、「誰もが加害者にも被害者にもなり得る」という構造的な問題、すなわちネット上の暴力的言説は状況次第で立場を反転させ、普遍的な危険となり得ることが露呈した点で極めて重要な段階であった。

3.2.4 第4段階：影響期（2023年3月以降）

鄭靈華の死は単なる個人の悲劇にとどまらず、中国社会においてネット暴力をめぐる制度的対応を求める声を高める契機となった。2023年3月以降の「影響期」には、国家レベルでの政策介入が徐々に具現化していく。まず、2023年3月5日に発表された『政府工作報告』では、「大力发展数字经济，提升常态化监管水平，支持平台经济发展」（「デジタル経済を大いに発展させ、常態化した監督

管理水準を引き上げ、プラットフォーム経済の健全な発展を支援する」と明記され、デジタル経済とネット空間の秩序ある発展を図るための監管強化が政府の重要課題として位置づけられた（李克強 2023）。直接的に個別事件の名指しはないものの、鄭靈華事件を含む一連のネット暴力事案への社会的関心の高まりを背景に、ネット環境の整備が国家政策の重点として再確認されたと言える。さらに同年9月には、最高人民法院・最高人民検察院・公安部が『关于依法惩治网络暴力违法犯罪的指导意见』（ネット暴力違法犯罪を法律に基づき処罰することに関する指導意見）を正式に公布し、ネット暴力行為の類型ごとの罪名適用、証拠保全、プラットフォーム事業者の責任などについて二十条にわたる具体的な判断基準を示した（最高人民法院・最高人民検察院・公安部 2023）。こうした一連の動きは、従来の事後的・個別的な対応から一歩踏み込み、ネット中傷を抑止するための制度的枠組みを整備しようとする志向が国家レベルで強まっていることを示している。

第4段階の特徴は、個別事例が国家政策の方向性に影響を与える「事件契機型の制度改革」として機能した点にある。すなわち、鄭靈華事件はネット環境に関する規制強化を正当化する象徴的事件となり、個人の悲劇が公共政策の形成に直結するプロセスを如実に示した。

もっとも、制度的対応の強化には限界も存在する。仮に法律や規制の整備が進んでも、ネット中傷を生み出す背景にはジェンダー偏見や競争社会における過剰な成功志向といった文化的・社会的要因が横たわっている。これらは制度改革だけでは解決が難しく、社会意識の変容を伴わなければ根本的解決には至らない。その意味で、この「影響期」は制度

的対応の必要性と同時にその限界も露呈した時期であったと言える。実際、鄭靈華事件を契機とした社会的認識の変化は、「感情的な炎上」から「制度的課題」であるネット中傷問題への移行という重要な転換点を画したものの、ジェンダー不平等の解消という更なる課題を社会に突き付けたのである。

しかし、事件後の社会的議論の多くは、SNSという環境要因や法制度の不備といった制度的側面に焦点が当てられ、事件の背景にあったジェンダー構造や社会文化的偏見といった根源的問題への言及は必ずしも十分ではなかったように思われる。もちろん、安全なインターネット環境の整備や法的対応の強化は必要不可欠であるが、そこで強調されがちなのは匿名で他者を攻撃できてしまうSNS一般の構造的課題やプラットフォーム管理上の課題といった側面であった。その結果、鄭靈華事件の背景に横たわっていた構造的ジェンダー差別や社会的偏見の問題は十分に論じられず、見過ごされがちになったのである。実際、鄭靈華が受けた攻撃の中心には彼女の容姿や振る舞いに対する性差別的な偏見が確かに存在していたにもかかわらず、事件後の社会的関心は次第にネット暴力一般の問題へと移行し、ジェンダーに根ざす構造的な課題への目配りは薄れていった。

こうした論点のすり替えは、悲劇的な事件ほど起こりやすい傾向がある。個別の事例が制度論や道徳論に回収されることで、社会に潜む差別構造自体への追及が後退してしまうリスクを孕んでいると言えよう。

4. 議論

以上の分析から、鄭靈華事件における被害者・加害者・メディアの相互作用は、SNS

時代のジェンダー論争に典型的なパターンを示していることが明らかになった。すなわち、SNSの匿名性・即時性・多数性によって感情的対立が容易に激化し、そこで生じた炎上はメディア報道によって社会全体の問題へと拡大・構造化され、議論は賛否二極化したまま平行線をたどる論争構造に固定化され、最終的に悲劇的な結末を迎えると問題の焦点が制度的・技術的側面に矮小化されて当初のジェンダー構造の問題が看過される傾向がある。こうした現象は単なる個別のトラブルではなく、現代中国社会における構造的なジェンダー不平等とメディア環境の特性を浮き彫りにするものであると考えられる。

特に、本事件では高学歴女性の自己表現に対する否定的反応や、中傷加害者となった高学歴男性の存在、商業主義的なメディアの煽動、そして制度的対応の限界が一挙に表面化した。これは、高学歴女性の台頭をめぐる社会的葛藤やジェンダー偏見、競争社会特有の嫉妬の力学といった構造的な問題が、SNSという増幅装置を通じて顕在化したことを意味する。言い換えれば、鄭靈華事件はデジタル時代におけるジェンダーを巡る言説の脆弱性を象徴的に示す事件であり、その教訓は同種の問題が今後も繰り返し生じ得ることを示唆している。

以上から、真に問題を解決するためには、法制度の整備やプラットフォーム規制の強化にとどまらず、ジェンダーに関わる社会意識の変革や教育の充実を含む包括的なアプローチが求められると考えられる。本事件の分析で浮かび上がった構造的課題に正面から向き合うことこそが、現代中国社会におけるジェンダー平等実現へ向けた重要な一歩となるだろう。

要するに、鄭靈華事件は単なる個別ケース

ではなく、現代中国における「高学歴女性」「自己表象」「SNS環境」「ジェンダー偏見」が交差する典型的な事例である。そして、本事例は、ネット空間において共感が欠如するなかでジェンダー偏見が増幅される構造が存在することを示唆している。

しかしながら、以上の分析だけでは、ジェンダー不平等が当事者の生活世界にどのように作用し、女性自身がそれにいかに向き合っているのかを十分に把握することはできない。以上で指摘した高学歴女性への潜在的偏見、成功表現に対する社会的反発、SNS上の中傷と可視性の危険性といった構造的な問題は、実際に当該環境で生活する女性たちの主観的経験と密接に結びついていると考えられる。とりわけ、以下に示す点については、メディア分析だけでは十分に検討できない課題として残されている。

第一に、女性当事者はSNS上の可視性にどのような恐怖やためらいを抱き、どのように自己表象を調整しているのか。その過程には、社会規範からの無意識的圧力や自律的判断の両面が入り混じると想定されるが、その実態はメディア報道からは捉えられない。

第二に、女性回答者が日常的に経験しているジェンダー偏見や競争的圧力が、SNS利用の態度や行動にどのような影響を与えているのか。また、男性回答者が認識するジェンダー構造との落差や相互理解の可能性についても、より当事者の視点からの検討が必要である。

第三に、SNS上の攻撃や誹謗中傷に直面した場合、当事者はどのように対処し、その過程でどのような葛藤や心理的負担を抱えるのか。これらは、ジェンダー不平等の構造が生活世界にどのように浸透しているかを理解するうえで欠かせない視点である。

鄭靈華事件についての本稿での分析は、こ

うした論点が重要になることを示唆した。

5. おわりに

本稿は、SNS という新たな公共空間においてジェンダー不平等がいかにか可視化され、そして再生産されているのかを検討したものである。高学歴女性への中傷事件を手がかりに、SNS 上における成功や幸福の表象が、性別に基づく規範や感情と交錯しながら攻撃の対象へと転化されていく過程を明らかにした。そうした言説が個人の発信にとどまらず、メディア構造やプラットフォームの仕組みによって可視化・拡散され、社会的な対立やジェンダー規範の再確認へとつながる構図もまた浮かび上がった。さらに、他者との比較や承認をめぐる競争が常態化する SNS において、女性自身が他の女性を監視・規律し、既存の性別秩序の維持に加担せざるを得ない現実も見逃せない。

こうした分析から明らかになるのは、SNS が単なる情報発信の場ではなく、ジェンダーの不均衡を増幅しうる構造を内包した空間であるという点である。とりわけ、感情や規範、可視性が制度的に組み合わせる SNS だからこそ、旧来的な不平等が新たな形で現れる可能性がある。本稿は主として言説の構造的な分析に依拠したものであるが、今後は実際の SNS 利用者、とりわけ高学歴女性へのインタビュー調査を通じて、可視性と抑圧、共感と排除のあいだで揺れる当事者の経験を丁寧に拾い上げ、ミクロとマクロを架橋する実証的研究へとつなげていきたい。ネット空間におけるジェンダー平等の可能性を探るうえで、その出発点となる知見を本稿が提供できていれば幸いである。

参考文献

- Boyd, Danah, 2014, *It's Complicated: The Social Lives of Networked Teens*, New Haven: Yale University Press.
- Chou, H.-T. G. and Edge, N., 2012, "They Are Happier and Having Better Lives than I Am: The Impact of Using Facebook on Perceptions of Others' Lives," *Cyberpsychology, Behavior, and Social Networking*, 15(2): 117-121.
- Spears, R. and Lea, M., 1994, "Social Identity and the Effects of Deindividuation in Computer-Mediated Communication," *Communication Research*, 21(4): 427-449.
- Suler, J., 2004, "The Online Disinhibition Effect," *CyberPsychology & Behavior*, 7(3): 321-326.
- 上野千鶴子, 2015, 『女ぎらい——ニッポンのミソジニー』紀伊國屋書店。
- 四方由美, 2021, 「ミソジニーはなくせるか——メディアのジェンダー・バイアス解消という課題」『マス・コミュニケーション研究』99: 49-56。
- 中国互聯網絡信息中心, 2024, 「第 54 回 中国互聯網絡發展狀況統計報告」, 中国互聯網絡信息中心ウェブサイト, (2024 年 12 月閲覧, https://www.cac.gov.cn/2024-08/30/c_1726702676681749.htm)。
- 中華人民共和國国家統計局, 2025, 「2023 年《中国妇女发展纲要(2021-2030 年)》统计监测报告」, 国家統計局ウェブサイト, (2025 年 11 月閲覧, https://www.stats.gov.cn/xxgk/sjfb/zxfb2020/202501/t20250124_1958439.html)。
- 中国青年報, 2022, 「女孩求职遭遇网络暴力: 我一夜之间掉进了深渊」, 中国青年報, (2025

- 年 11 月 閱 覽, https://www.sohu.com/a/572666281_162522。
- 北青深一度, 2023, 「直到网暴的潮水将那朵粉色吞没」, 北京青年報深度報道部, (2025 年 11 月 閱 覽, <https://finance.sina.com.cn/jjxw/2023-02-23/doc-imyhsmqu8668104.shtml> ;
- 中国数字時代アーカイブ : <https://chinadigitaltimes.net/chinese/693406.html>。
- 法治日報 - 法治網, 2023, 「专项立法让网络暴力不敢暴不能暴」, 法治日報, (2025 年 11 月 閱 覽, https://fr.jschina.com.cn/31007/202303/t20230323_7876676.shtml)。
- 最高人民法院 · 最高人民檢察院 · 公安部, 2023, 「关于依法惩治网络暴力违法犯罪的指导意见」(法发〔2023〕14 号), 最高人民
民法院ウェブサイト, (2025 年 11 月 閱 覽, <https://www.court.gov.cn/zixun/xiangqing/412992.html>)。
- 李克強, 2023, 「政府工作报告——2023 年 3 月 5 日在第十四届全国人民代表大会第一次会议上」『国务院公报』第 8 号, 中国政府網, (2025 年 11 月 閱 覽, https://www.gov.cn/gongbao/content/2023/content_5747260.htm)。
- 譚亞明, 2012, 「媒体报道要走出性别认知困境——以媒体报道的李阳家暴事件为例」『今传媒』20(4) : 56-57。
- 伍丽亚, 2022, 「网络集群行为的价值累加——以“刘学州网络寻亲”事件为例」華中師範大学新聞傳播学院 2022 年度修士論文。